第11回「若者と学ぶ部落問題解決の道筋・学習会」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2014.10.04/中島純男

一、映画・橋のない川　感想を語り合う

1、橋のない川・第１部のあらすじ

　　ほるぷ映画作品　　　　　　　　　　　　　　　【別紙　資料Ⅰ　参照】

　　1969年製作

2、橋のない川・第２部のあらすじ

　　ほるぷ映画作品　　　　　　　　　　　　　　　【別紙　資料Ⅱ　参照】

　　1970年製作

3、住井すゑさん

　(1)経歴など　　　　　　　　　　　【別紙　資料Ⅲ　参照】

(2)映画・橋のない川への思い

・映画にしたかった理由

　　・明治１００年に

　　・修学旅行の捉え方

　　・永井藤作の爆発

4、今井正監督

　(1)経歴など　　　　　　　　　　　【別紙　資料Ⅳ　参照】

(2))映画・橋のない川への思い

　・1970年前後の時代背景

　・当時の映画界

　・妨害に屈せず

5、観賞した人たち

　①木村京太郎さん

　　奈良県御所市　1902(明治35)年生まれ

②灘本昌久さん

　　　上映阻止運動に反省の声明　　1956(昭和31)年生まれ

　③上映運動

6、今日的にみる視点

・東上高志さんの弁

「ヒューマンな眼で見ているだけであって、社会問題としての部落問題、そのことを通してなにを描くのだ、というつくられ方ではない」

「ヒューマンな眼というのはもっと現実に腰を下して、その現実に生きている人のその眼を通さないと出てこない。その点では怒りにまで発展しないヒューマンな映画つくりということで終わってしまっている」

「ところが、そのことが逆に非常に多くの人に見られていることの要素にもなっている」

(抜粋)　映画「橋のない川」上映阻止は正しかったか　今井正版・東陽一版を見て

部落問題全国交流会事務局『第９回部落問題全国交流会報告書』、１９９３年４月

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　灘本昌久

小森部落の近くで陸軍大演習があり、村々には宿泊の割当がある。しかし、小森部落には宿泊の割当はない。そんな中、畑中誠太郎・孝二の母ふで（長山藍子）は少ない食料の中からさつまいもをふかして子どもを連れて差し入れに行く。寒さと飢えの中で兵隊達は感謝の言葉もない。そして、話をしているうちに、ふでの夫進吉が日露戦争で戦死していることを知る。“あぁ、この寒い中差し入れを持ってきてくれるのは、この婦人が戦争未亡人だからだ。そして、この子たちは戦争遺児か。”兵士たちは誠太郎、孝二の頭をなでて感謝の言葉を述べる。ふたりは、兵士たちと心の交流ができて最高の気分だ。次の日、小学校では地主の子佐山仙吉が得意満面だ。軍用の双眼鏡を持ってきて皆にみせびらかし、兵隊を泊めるために寝具は新調しご馳走を準備していたのに、訓練の事情で泊まってもらえなかったのは残念だと、鼻高だかにいいふらしている。そして、「小森はいいな、兵隊さんが泊まらへんから」と悪態をついた。すると、永井藤作の娘しげみが言い返す。「小森は畑中誠太郎たちがさつまいもをふかして差し入れをしたので、結果的になにもしなかった佐山たちよりも上だ」。ところが、仙吉は言い返す。「あの兵隊さんは名古屋師団で、このへんのことは、なんにも知らんからや。もし誠やんが小森の者やいうのわかったら、なんでそんなさつま食うもんか。かわいそうに、負けいくさの兵隊は、とうとうエッタのさつま食いよった。くうさい、くうさい、エッタのさつま食いよった。ははゝゝゝ」。

仙吉の指摘した差別の現実の前には、前日の兵隊たちとの楽しい会話も、幻のように粉々にうちくだかれざるを得ない。その差別の現実に、誠太郎・孝二は八つ裂きにされたのである。

ここから小森の子どもたちと佐山仙吉たちとのあいだでの乱闘、教師による誠太郎たちへの一方的断罪、祖母ぬい（北林谷栄）の校長への抗議とつながっていく。「わいら生まれてこの方、世間の人からエッタ言うて人間扱いされんと来ましたんや。せやけど、わしらかて人間や。手も二本、足も二本ありまんがな。指かて、見ておくなはれ。せやけど、世間の人はわいらをエッタ言うて、けだもんみたいに言いまんねや。なんぼ自分で直そ思うてもエッタは直せまへん。校長先生、どねしたらエッタが直るんか教えとくなはれ。」当時は、聖域と考えられていただろう職員室に無学文盲の老女が乗り込んで、しかも校長に詰めよるというのは、現実には不可能に近いことであったかもしれないが、北林谷栄の迫真の演技で見るものの心に迫る。

　地主の佐山家の家の庭には、小作人が年貢を大八車に積んで、続々と運んでくる。ある一般の小作人が、小作料が高いとおずおずと苦情を言う。すると番頭は、小森のもんなら年貢をもう一俵よけいに納めるので、いつでも土地を返せとおどかすと、小作人はぐうの音も出ずに引き下がる。

次は、ぬい・ふでたちの番だ。番頭は、「ええ米や」と一言。ここでぬいは、飲んだくれの永井藤作に田を借りてもらってくれと頼まれていたのを思い出す。頼まれた時には、「米の水にでもなるんやろ」と相手にしていなかったが、その場の雰囲気で借りれるかも知れないと思い、藤作への親切心で番頭に頼む。ところが、番頭は憮然として言い放つ。小森の者には土地は貸さない。お前のところは、息子が名誉の戦死やから貸してやっているのだ。だいたい、このあいだ、お前ところの誠太郎が仙吉ぼっちゃんを怪我させたのだ。そんな頼みごとができるとはいい根性だ。うちの旦那さんは、人間ができているから息子に怪我をさせられても田を取り上げるとうようなことを言い出さないのだ。ありがたいと思え。

ぬいたちは、孝二が仙吉をなぐったのは仙吉が差別をしたことに原因があると内心怒りを覚えつつも、番頭に謝って引き下がるしかない。このように、「橋のない川」第一部では、差別社会の中で声をあげれない部落民の置かれた立場、行動の必然性が伝わってくる。

終わりに至るまでに、部落解放同盟の「橋のない川第二部　糾弾要綱」で差別だと指摘されている場面があちこちに出てくる。そして、差別だと納得させられるところが、一つもないのだ。そのひとつひとつを検討していくのは煩雑にわたるので、よく知られているところを紹介しておく。

ひとつは、飲んだくれの永井藤作が列車で席を横取りする話である。どんなに部落民の否定的な像を誇大に描いているのかと思って見ていると、たいしたこともないシーンだ。部落の中でも飲んだくれでだめなやつと見られている藤作が社会の基本的なマナーからはややはずれたことをして、それを同じ小森部落の畑中孝二が「難儀なおっちゃんやなぁ」とたしなめるだけのシーンだ。あのシーンを見て、部落の人はああなんだと思う人は既にそうした部落観をもっているのだろうし、そうでない人には、部落にいる難儀なおっさんの非行にしか過ぎない。あれで、差別意識が増幅したりするような種類のものではない。

　この藤作のむすめしげみが畑中孝二に蛇を投げるシーンも同様である。「孝ちゃん、蛇きらいか……うち、好きや。焼いて食べたらうまいで」というセリフはここだけ取り出すと、あるいは不快に感じる人もいるだろうが、ここでは字句どおりに蛇を食べる話にとってはいけない。孝二に好意をいだくしげみが、蛇に驚く孝二をからかうためにわざといっているシーンなのだ。思春期になるかならないかの若い子どもにありがちなほほえましい感情表現ととるのが普通の見方だろう。もっとも、ここあたりこそ実際に映画を見てもらうしかないが。